

役割を演じる

巻・頭・言

特許庁技術懇話会 平成21年度常任幹事広報担当 保田 亨介



元旦からだいぶ日にちが経ってしまっていますが、新年、あけましておめでとうございます。新たな年の幕開けでございます。私事ではございますが、ついこの間学生生活を終えて入庁したばかりだと思っておりましたところ、もうすぐ審査官として独り立ちする時期が近づいていることにハタと気づき、月日の流れのはやさに軽い恐怖を感じました。

さて、まもなく審査官に昇格しようとしているこの時期に、ある同期から、「もう一度法令や審査基準を詳細に読み込もう」という提案がなされました。これまでは指導者としての審査官の庇護のもとで、ある意味では気楽に審査業務ができたわけですが、今後は自身が審査官となって自身の責任で審査を進めていかなければなりません。言うまでもないことですが、審査官の仕事は、法令・基準に則って審査をすることですから、審査官として自立するにあたり、法令・基準は正確に頭に入っていなければなりません。

ところで、既出の同期とは、週末一緒にホームパーティーをしたりロードレーサーで峠を駆けめぐったりしています。発明に対して強力な独占権を付与するか否かを判断するという、まるで神の裁きをしているかのような冷静かつ論理的な人間が、週末になると10代の学生の頃に戻ったみたいに元気に遊んでいるわけです。

このような状況に、私はしばらく違和感を覚えておりました。平日審査をしている人間と、休日無邪気に遊んでいる人間とは、あまりにもギャップがありすぎるため、両者を同一人物として認めることが奇妙でならなかったのです。

長い間考えた末、自分なりに答えを導き出すことで、先の違和感はやがて解消されました。その答えとは、人間は誰も仕事の上ではあるロールモデルに従って「役割を演じている」のだというものです。つまり、ある人の本当の姿はオフの時間にだけ表層化されるものであって、仕事モードにスイッチが入った途端その人は、社会的役割を担う仮の姿で本性を覆い隠してしまうのです。

「審査官」の例でいえば、「審査官」ならこうすべきというロールモデルとしての法令・審査基準があり、それに則って「審査官」としての役割を演じるわけです。経験したことがないので推測で申し上げますが、きっと「弁理士」のお仕事をなさっている方は「弁理士」たるべきロールモデルを念頭に置きつつ、「弁理士」としての役割を演じているのでしょうし、「発明者」の方も、「発明者」ならこうすべきという何らかのお手本があって、それに沿った行動をなさっているのでしょう。してみれば、私も面接室で指導官と共に、「弁理士」及び「発明者」の方々との面接をする機会がございますが、面接室で起きている状況を俯瞰で眺めてみると、「審査官補」、「審査官」、「弁理士」、「発明者」という各々の役割を背負った役者たちが、一致団結して「面接」というお題目の演劇を成功に導こうとしているみたいで、緊張しがちな面接も、なんだか楽しく思えてきます。

ところが最近のニュースを見ていると、楽しいなどと悠長なことを言っている場合ではなさそうです。未曾有の経済危機・ユーザの消費意欲の低下・若者の職業観の変化・少子化等の様々な要因から、これまで頼りにしていたロールモデルが大きく崩壊し、改革を余儀なくされている産業が多々ございます。前号の巻頭言でも触れられております通り、産業の変化に応じて「審査官」に求められるものも変化する可能性がありますから、「審査官」の役割を真に演じきるには、ただやみくもに審査に邁進するだけでなく、時には産業の動向を見渡して、広い視野を身につけることも必要なかもしれません。

本号の特集テーマは「農業技術」に関することです。昨今のような厳しい社会情勢の中でも輝き続けている日本の「農業技術」においては、一体どのような変革がなされているのでしょうか。視野を広げるためのヒント、ひいては、真の「審査官」を演じる上で高みを極めるためのヒントが、ここに隠されているかもしれません。